

歯刷子ロードを辿る*

—楊枝歯刷子と植毛歯刷子—

中原 泉** 陶 栗 嫻***

要 旨

歯刷子はインドに発祥し、中国を経て日本に渡来したという。この伝来した道を、シルクロードに因んで“歯刷子ロード”と呼ぶ。

歯刷子は、歴史的にみて楊枝歯刷子と植毛歯刷子に分類できる。

楊枝歯刷子は、古代インドにおける仏教の嚼歯木に始まり、中国の嚼楊枝から、日本の房楊枝に至る。アラビアにおけるイスラム教の嚼楊枝も加えられる。

一方、植毛歯刷子は、中国の刷牙子に始まり、欧州の歯ブラシから、日本の歯刷子に至る。

前者の嚼歯木、嚼楊枝、房楊枝は、インド、中国、日本の各々の国の習俗に合わせて、その性格を異にする。

後者の刷牙子、歯ブラシ、歯刷子は、中国、欧州、日本の各々の国の習俗に拘らず、その性格を同じくする。

斯く、歯刷子ロードを辿って、隠れた歯刷子の史実像を浮彫りにした。

(キーワード)

歯刷子、嚼歯木、嚼楊枝、房楊枝、植毛歯刷子、シルクロード

絲 綢 之 路

絲綢之路（シルクロード）。

この美しい響きをもった絹の道は、西のローマからトルコを経て、パミール高原で3つのルートに分れる。

天山山脈の北側をまわる天山北路、同じく南側とタクラマカン砂漠の間を抜ける天山南路（また西域北道）、同砂漠の南縁をゆく西域南道である。

この3道はふたたび敦煌で合流し、祁連（きれん）山下を河西回廊伝いに酒泉、蘭州を通して長安（現在の西安）に至る。河西回廊とは、黄河の西にひらけた細い通路をいう。

一方、南のインドからは、パキスタンを経てカラコルムの山嶺を越え、最寄りの西域南道に入る。

“上に飛鳥なく、下に走獣なし”と形容された、連なる峻険と荒涼たる砂漠。タクラマカン砂漠だけとっても、日本の面積に匹敵する。この長い陰路を辿って、駱駝（らくだ）をつらねた隊商が、中国から絹糸と絹織物をはるか西方にもたらし、この史実から、19世紀のドイツの地理学者が、Seiden-straße（絹の道）と名づけた。

けれどもこの道には、むろん絹だけではなく、夥しい人と物が絶え間なく往来した。それは、東からは紙の道でもあり、西からは葡萄（ぶどう）の道であり、胡麻（ごま）や胡椒（こしょう）の

* Tooth brushes' road

** Sen NAKAHARA, The Museum of The Nippon Dental University at Niigata 日本歯科大学新潟歯学部・医の博物館

*** TAO Su-xian, Shanghai Second Medical University 上海第二医科大学・附属第九人民医院

本論文の要旨は、第17回日本歯科医学会総会（1991年10月・大阪）のポスターセッションにおいて発表した。

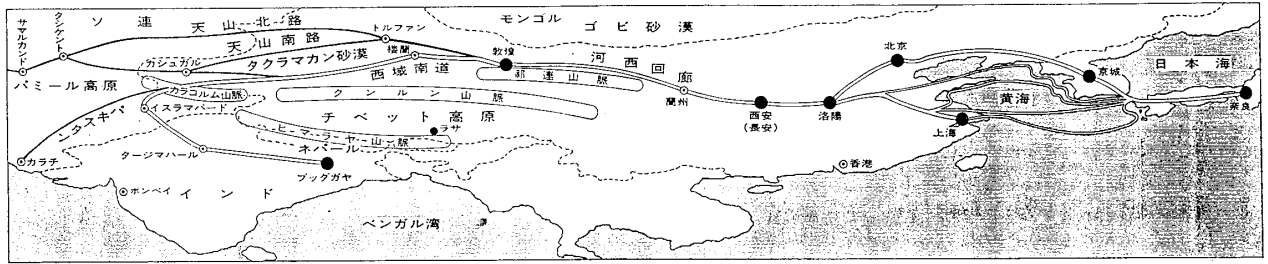


図1 シルクロード地図

道であり、バイブル（聖書）の道であり、マルコ・ポーロの東方見聞録の道であった。また、南からは琥珀（こはく）や瑠璃（るり）の道であり、コーラン（聖典）の道であり、仏陀（ブッダ）の道であった。

立川¹⁾によれば、かつてエンデミー（風土病）が文化の交流によってパンデミー（世界的流行）となることから、シルクロードは実はマラリアの道であり、痘瘡の道であり、ペストの道でもあった。

となれば、絲綢之路は齒刷子之路、つまり齒刷子ロードであったかもしれない（図1）。

インドの嚼齒木

さて、楊枝（ようじ）はインド（印度）に起こり、仏教とともに中国を経て日本に伝えられた…というのが定説とされている。

すでに、古代インドの時代に「齒木」が使われていたという。齒木は、梵語（古代インドの文語であるサンスクリット）でdantakastha という。danta とは歯、kastha は木片を意味する。つまり、ダンタカーシュタは歯を清掃する木片のことである。のちに中国では、これを「憚哆家瑟託」と音訳した²⁾。

当時、釈迦（仏陀）の教えが広まると共に、僧侶の戒律の一つとして、朝、仏に詣でるまえに齒木の一端を噛んで、口中を淨めることが習慣づけられた。その事の由来は、仏經典に少なからず記されている。

中国の「大正新脩大藏經」の四分律第53に、「時諸比丘口臭、佛言応嚼楊枝、不嚼楊枝、有五事過、口臭臭、不別味、增益熱瘥、不引食、眼不明、不

嚼楊枝有如是五過、嚼楊枝有五事利益、一口氣不臭、二別味、三熱瘥消、四引食、五眼明、嚼楊枝有如是五事利益。」とある³⁾。

すなわち、僧侶から口臭対策を問われた釈迦が、「楊枝を嚼まねば五つの不利があり、楊枝を嚼めば、一に口臭臭わず、二味感がよく、三熱瘥が消え、四食がすすみ、五眼がよくなる、という五つの利益がある。」と説いた。

同じく同典十誦律第40には、「佛言、聴嚼楊枝、有五利益、一者口不苦、二者口不臭、三者除風、四者除熱病、五者除痰瘥、復有五利益、一者除風、二者除熱、三者口滋味、四者能食、五者眼明。」と読める。

また、「増壹阿含經」にも、「時世尊告諸比丘、施人楊枝、有五功德、云何為五、一者除風、二者除涎唾、三者生藏得消、四者口中不臭、五者眼得清淨。」という同様の記載がみられる⁴⁾。（注・傍点はいずれも筆者）

ここで注意すべきは、両經典ともに、仏法上の「齒木」の起こりを語っているにも拘らず、「楊枝」と記し「楊枝を嚼む」と表現していることである。

前後するが、唐僧の義浄三蔵（635—713）は、インドに修業中、見聞記「南海寄歸内法傳」（681年）を著し、都長安へ送った。彼は海路東南アジアを廻ってインドに渡り、20余年滞在し695年に帰国した。同書は、当時のインドや南海諸島の戒律や規律を、中国の僧風と比較して、本来の教えが正しく伝えられていないことを危惧し、本国の僧侶たちに釈尊（釈迦の尊称）の説法を遵守するよう戒めている。

40項目からなる同書の「八 朝嚼齒木」に、齒

木と楊枝に関して詳述している⁴⁾。

「毎日旦朝須嚼齒木，楷齒刮齒務令如法。盥漱清淨方行敬禮。若其不然受禮他悉皆得罪。其齒木者，梵云憚哆家瑟訖。憚哆譯之爲齒，家瑟訖即是其木。長十二指，短不減八指，大如小指。一頭緩須熟嚼，良久淨刷牙關。」

すなわち「毎日旦朝には須らく齒木を嚼み齒を摺り舌を刮って，務めて如法ならむべし。盥漱清淨にして，方に敬礼を行ぜよ。若し其れ然らざれば，礼を受け，他を礼するに，悉く皆な罪を得るなり。其の齒木は，梵語は憚哆家瑟訖と云ふ。憚哆は之を訳して齒と爲し，家瑟訖は即ち是れ其木なり。長さ十二指にして，短きも八指を減ぜず，大さは小指の如し。一頭は緩く熟嚼すべし，良久しうして淨く牙關を刷る。」（小野玄妙訳）

その他，同書の「四 餐分淨觸」には，「不避猪犬不嚼齒木，逐成譏議」，また「五 食罷去穢」には，「口嚼齒木，疏牙，刮舌，務令清潔」，「不畜淨瓶，不嚼齒木，終朝含穢，意夜招愆」の記載がある。（注・傍点は筆者）いずれも，食前後における淨・不淨の作法に関する戒めである。

このように7世紀後半のインドでは，齒木は単なる齒の清掃具ではなく，仏事（仏教儀式）における仏具であった。この淨歯具である齒木を嚼む行為は，仏徒の敬虔な作法として広く定着していたことが分る。

義浄に先立つ唐僧，三蔵法師の名で知られる玄奘三蔵（602—664）は，長安を脱して西域を転々と巡り，中央アジアのサマルカンドから南下し，パキスタン北東のガンダーラからインダスを渡河してインドに至る。17年後の645年，歴大な經典を携えて帰国した。彼はインドの習俗として，食事のあと楊枝を噛んで齒を清掃することを，見聞記「大唐西域記」（646年）に記している。

このことは，義浄の説いた齒木を嚼む習慣が，すでに7世紀前半にインドに普及していた史実を物語っている。

齒木と楊枝

ここで注目すべきことは，義浄が「朝嚼齒木」の後段で，楊枝の命名に関して疑問を呈し，手厳

しい批判を加えている点である。

「……牙の疼（いたみ）は西国には迴に無し。良に其の齒木を嚼むが爲めなり。豈に齒木を識らずして，名づけて楊枝と作す容けんや。西国にては柳樹は全く稀なり。訳者は輒ち斯の号（な）を伝へたるも，仏の齒木の樹は実に楊柳に非らず。那爛陀寺にて目自から親しく観る。既に信を他に取らずば，聞く者も亦勞らはしく惑を致すこと無かれ。涅槃經の梵本を検するに，齒木を嚼む時と云へり。」

すなわち「……齒の痛みは，インドにはほとんど無い。まことに齒木を嚼むからである。どうして齒木を識らずに，楊枝と名づけたのか分らない。インドには，柳の樹はまったく稀である。訳者は安易にその名を伝えたが，仏の齒木の樹は実際に楊柳ではない。私は，那爛陀寺で目の当たりに観た。他の言を信ずることなく，読者はいたづらに惑わされないで頂きたい。涅槃經の梵本を調べてみると，齒木を嚼む時と言われている。」

楊枝という表現は，すでに後漢代にあらわれている。後漢（25—220）は光武帝が復興した漢王朝で，都は洛陽にあった。この時代，安世高が訳述した「仏説温室洗浴衆僧經」に，「仏告耆域澡浴之法，当用七物，除七病，得七福報」とある。そして仏徒の沐浴に用いる7つの具として，「一者然火，二者淨水，三者澡豆，四者蘇膏，五者淳灰，六者楊枝，七者內衣」を挙げている⁵⁾。（注・傍点は筆者）

玄奘に先立つ法顕（生没年未詳）は東晋代，399年に經典や律蔵（仏徒の戒律書）を求めてインドに発ち，412年海路で帰国した。その見聞記「法顕伝（仏国記）」は，5世紀初めの当時のインドや中央アジアの模様をつぶさに伝えている。

東晋（317—419）は，265年，三国の魏が建てた晋の滅んだ翌年に再興された王朝である。先の王朝を西晋というに對し，東晋と呼ぶ。

その「法顕伝」の第4章に，次のような説話がみられる⁶⁾。

「沙祇城南門，道東，仏本在比。嚼楊枝刺土中，即生長七尺，不増不減，諸外導婆羅門嫉妬，或切或拔，遠棄之，其処続生如故。」

「沙祇城の南門を出ると、道の東に仏がもともと楊枝を嚼み、土中に刺した処がある。楊枝はそのまま生長して高さ七尺となり、それ以上高くも低くもない。もろもろの外道や婆羅門が嫉妬して、あるいは切りあるいは抜いて、遠くへ棄てるが、その場所にまた続いて生えて元のようになる。」（長沢和俊訳）

ついで、6世紀中頃にインドを巡礼した宋雲と恵生の残した見聞記「宋雲行紀」にも、鳥場国の王城を訪れた折、「……釈尊はもともと清浄なので、楊枝を嚼み、これを地に植えるとただちに根がついた。今は大樹になっていて、土地の名（胡名）で婆桜という。」（長沢和俊訳）と記している⁸⁾。この婆桜というのは、梵名でハディラ (Khadira) の木を指す。

さらに、玄奘の「大唐西域記」の鞞索迦国の項にも、「在昔如来嚼楊枝棄地，因植根氏歲月雖久，初無増減。」と、同じ伝承がみられる⁹⁾。（注・傍点は筆者）

法頭のいう沙祇国も、宋雲の鳥場国も、玄奘の鞞索迦国も、インドス下流の地域にあった。いずれも、いわゆる釈尊による「楊枝植生伝説」である。このように唐の義浄をはるかに遡って、歯木は楊枝と漢訳されてきたのである。したがって、義浄の文には、300年にわたる歴代の先達たちに対する非難が込められているのだ。

ここで、義浄の批判文から、いくつもの事実を読みとることができる。

(1) インドの梵本には、歯木、歯木を嚼む、と表現されている。

(2) 仏經典（梵語）の漢訳に際し、訳者（僧侶）が歯木を楊枝と意識した。

(3) 7世紀後半の長安はじめ中国では、インドから伝わった歯木を楊枝と称していた。

(4) インドの歯木は、楊柳ではない。

(5) 楊柳は、インドには殆んど見られない。

(6) 先の中国の經典にみるとおり、義浄のきつい戒めにも拘らず、中国においては楊枝という呼び名は改まらなかった。

歯木の樹

それでは、なぜ中国では歯木という呼び方が受け入れられず、意識された楊枝が定着したのか。その疑問に対する答えも、義浄の批判文のなかに求めることができる。

義浄は、インドの歯木は楊柳ではないと明言しているが、では、歯木は何の樹木であるかについては触れていない。それは当時、周知のことで、今さら言及するまでもなかったのだろう。

先述のとおり、ダントカーシュタ（歯木）は歯を清掃する木片を意味し、その用途と形状を表わした別称である。この木の正式な名称を特定した史料は、見当たらない。

一説には、それはインド菩提樹であるという。その昔、釈迦はこの菩提樹のもとで成道（悟りをひらく）し、仏陀になったと言われる。これに因んで仏徒は、この樹をボーディ・ブrikシャ (Bodhi-vrksha)、すなわち“悟りの木”と呼びならわした。これを菩提樹と漢訳したのである。サンスクリット語でアシュパッタ (Asvattha)、その無花果（いちじく）に似た実をピッパラ (Pippala) と称したことから、別名ピッパラ樹ともいう。

学名は *Ficus religiosa* L., インドを原産地とするクワ科の常緑広葉樹で、大木に育ち多数の露出した根、気根をだす。インドでは古来、聖樹・靈樹として崇められ、寺院には必ず植えられた。ヒンズー教徒も、神聖な木として神々の栖（すみか）とみなした。それゆえに、釈迦の「成道伝説」を飾る格好の舞台装置として登場したのであろう。それは「歯木説話」においても同様で、歯木を仏事の浄歯具とするために、この仏の木を結びつけたのだ。

帰国に先きだって、禪師（高德の禪僧）に託して長安に送った「南海寄歸内法傳」。そのなかで義浄は、本国の僧侶がこの菩提樹の歯木を楊枝と異訳し、神聖な仏樹を穢したことを憤ったと考えられる。ここに、彼の批判の真因があったとみてよい。

ただし、義浄が批判の対象としたのは、あくまで仏門に帰依する僧徒であった。というのは、文

中（「朝嚼齒木」の）、彼は世の人々に齒木の用法と効用を次のように説いているのである。

「或は大木を破って用ゆ可し。或は小条を截りて為る可し。山莊に近きものは則ち柞条・葛蔓を先と為す。平疇に処るものは乃ち楮・桃・槐・柳を意に随って預め収め、備に擬して闕乏せしむること無かれ。湿れるは即ち須らく他に授くべし。乾けるは自ら執持することを許す。少壯の者は取るに任せて之を嚼み、老宿の者は乃ち頭を推して其の木条を碎かしむ。苦渋辛辣なるものを以て佳と為し、頭を嚼みて絮と成る者を最と為す。……齒を堅くして口は香しく食を消し癰を去る。之を用ふること半月すれば口氣頓に除き、牙疼齒患も三旬にして即ち愈べし。要す須らく熟く嚼み淨く摺ひて涎癰をして流出せしむべし。多くの水を淨く漱くことは斯れ其の法なり。」

「あるいは大きな木を裂いて使ってもよい。あるいは小枝を切って作ってもよい。山家に近い者はまず柞（ははそ＝なら）の枝、葛（かずら）のつるを使え。平地にいる者は楮（こうぞ）、桃、槐（えんじゅ）、柳のうち好むものをあらかじめ取っておき、齒木に似せて不足しないように備えておけ、湿っているものはすべからく人に与えよ。乾いたものは自分が持っていてよい。若い者はそのまま嚼み、老いた者は一端を押して茎を碎くようにせよ。苦く渋く辛くてピリピリするものが佳い。一端を嚼むと綿のようになるのが最上である。……齒を堅くし口を香ばしくし、食物の毒を消し血うみを取り去る。これを半月使うと口臭がすっかり消え、齒痛や齒の病いは三十日で治る。必ずよく嚼みきれいに磨いて、よだれと血うみを流しだすようにせよ。その方法は、沢山の水できれいに漱ぐことである。」

ここで彼は、齒木として“くぬぎ”や“かじのき”など好みの木を用いてよいと言っている。柳でもよい、と。それは宗教上の説法ではなく、齒木の効用と用法という実用的な教えである。それも、いわゆるブラッシングによる口臭、齒石や齒槽膿漏の治療法を伝授しているのである。当時の人々の口腔衛生状態を窺わせて、余すところない。

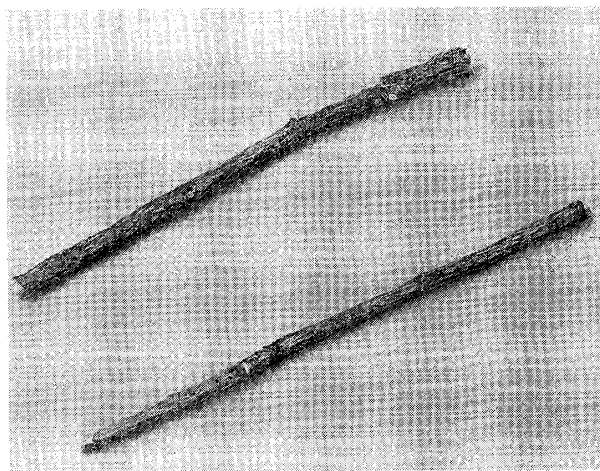


図2 ニームの樹枝（医の博物館所蔵）

「朝嚼齒木」の結語として、彼は次のように述べている。

「然かも五天の法は俗は齒木を嚼むは自ら是れ恒事にして、三歳の童子も咸く即ち教え為しむ。聖教も俗流も俱に通じて利益するなり。既に臧否を伸べたり。行捨は心に随ふべし。」

「しかも五天の法、いわゆる齒木を嚼むことは日常の習慣で、三歳の子供にも教えてやらせている。仏の教えも俗習も、相通じて利益となることである。以上その良否を述べた。実行する、しないは随意である。」

瀬戸⁴⁾によれば、インドでは今でも齒木として、インド菩提樹を用いているという。水に浸しておいた枝の一端の樹皮をはがし、剥きだした白い茎を箒のように噛みつぶして、それで齒を磨く。

一方、杉本⁵⁾、長谷川⁶⁾によれば、齒木として用いた木は、学名 *Azadirachta indica* であるという。熱帯性の落葉喬木で、樹枝も果実も苦味を帯びている。俗にニーム(Neem)、ニンバ(Nimba)等と称され、インドでは到るところに繁殖している(図2)。

このニーム樹は、家の囲いの生垣に植えられており、インド人は毎朝この小枝を手折って、一端を噛みくだいてその苦い液で口腔を漱ぎ、ささくられた一端で齒を磨き、水で吐きだす。これが、彼らの朝の日課であったという。

このニームの枝で齒を磨く習慣は、今でも南インドの幾つかの地方で行われている。

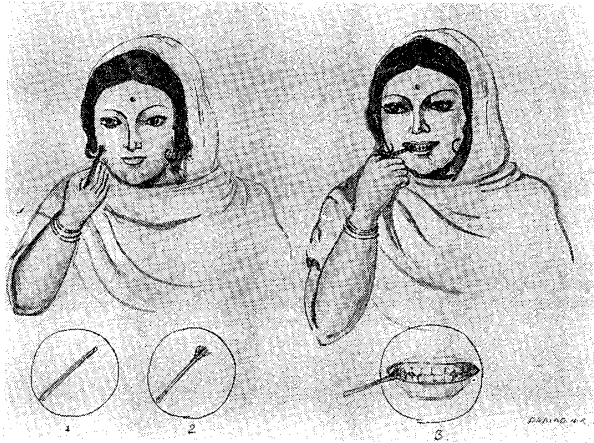


図 3 インドの嚼歯木の図（医の博物館所蔵）

その他、南インドの別の地方では、アカシア（学名 *Acacia Arabica*）の枝が広く使用されている。また、同じく南インドの Andhra Pradesh と Tamil Nadu の両州では、ポンガミア（学名 *Pongamia Glabra*）の茎の部分が用いられている。さらに、南インドの Karnataka 州の South Kanara 区では、マンゴッ（学名 *Mangofera Indica*）の茎・葉・葉脈の筋が広く使われている。

つまりは、インドでは各地方によって異なる樹枝を用いているものの、嚼歯木の習慣は今日に至るまで庶民の営為として行われているのだ（図 3）。

中国の嚼楊枝

さて、中国長安では、なぜ歯木を楊枝と異訳したか、その理由は推量できる。

(1) インド菩提樹は熱帯性植物なので、中国では育たない。中国産の菩提樹は寺院などに植栽されているが、学名を *Tilia miqueliana* というシナノキ科の落葉喬木で、インド菩提樹とは別の木である。

(2) ニーム樹もまた熱帯性植物で、中国にはみられない。

(3) 中国には、楊柳が広く繁殖していた。楊柳は、ヤナギ科の落葉喬木である。楊はカワヤナギで、葉が広く枝が硬くて上向いている。柳はシダレヤナギで、葉が細く枝がしなやかで垂れ下っている。その他、ハコヤナギに類する白楊というポ

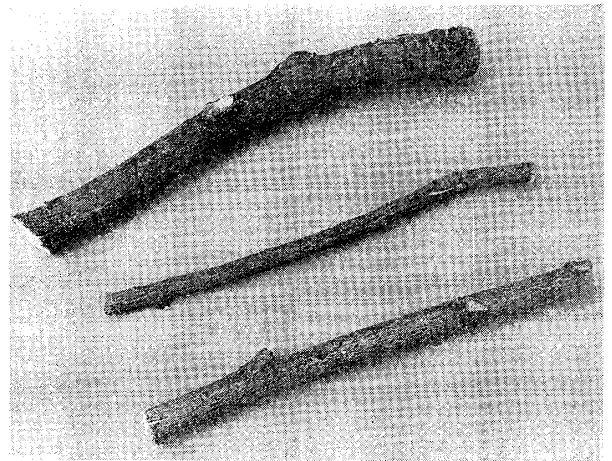


図 4 楊柳の樹枝（医の博物館所蔵）

プラの一種もみられる。

(4) 楊柳は華奢な形状に似ずしたたかに根強いことから、中国では破邪の力をもつ神聖な木として尊ばれてきた。

「……楊枝を以て左右門上に挿み、楊枝の指す所に随い、乃ち酒脯飲食及び豆粥……を以て箸に挿んで之を祭る。」（「荆楚歳時記」¹³⁾）。また、「……正月の旦、楊枝の枝を取りて戸上に著けば、百鬼家に入らず。」（「齊民要術」¹⁵⁾）など、楊柳には霊が宿り、魔除けの力があると信じられていた。

(5) 楊柳には、漢方薬としての効能があると伝えられてきた。唐の蘇敬らの校訂した「新修本草」（659 年）に、「楊柳皮は味辛く、大熱薬で毒性があり、齩蝕の痛みを治す。」と記されている⁶⁾。器械的な清掃作用と共に、漢方薬の作用を備えているとすれば、浄歯具、口腔清掃具として最適といえよう。

このように、中国にはインド菩提樹もニーム樹もないことから、同じ樹木信仰のある楊柳に置き換え、歯木を楊枝と異（意）訳したのでらう（図 4）。

ここでいう中国の楊枝は、歯間をせせる小楊枝ではない。嚼歯木から転化された歯刷子としての「嚼楊枝」である。同じ楊柳を材としていても、嚼楊枝と小楊枝は口腔清掃具としては基本的に異なる。一方はいわゆる tooth pick であり、他方は tooth brush である。したがって両者を論じる場

合、両者を混同してはならない。

翻えて、南宋(1127—1279)の都臨安(現在の浙江省の杭州)の世態を捉えた「東京夢華録」¹⁸⁾には、次のような記載がみられる。

「馬行街水諸医舗、有齒咽喉薬、……出梁門西去、街水建隆観、観内東廓于道士、齒薬、都人用之、……相国寺内万姓交易……、有卖洗嗽類。」
「馬行街の水辺にあるもろもろの薬屋には、齒と咽喉の薬がある、……梁門を出て西へ行くと、街の水辺に建隆観があり、観内の東廓では道士が、齒の薬を売っており、都の人々はこれを用いている、……相国寺内で大勢の人々が商売をして……洗嗽類も売っている。」

道士とは、仏教もしくは道教(中国固有の宗教)を修めた人をいう。齒薬とはどのような薬なのか未詳であるが、このように仏門にある人が俗世の人々を教え導く身として、口腔の衛生治療の薬などを広めていたのである。彼らはいつの時代も、啓蒙家としての役目を担っていたのだ。

高僧義浄はその頂点に立って、僧徒・俗人を問わず、もっともアクティブに真摯に示教(具体的に教示する)に努めた人物であつたろう。それにも拘らず、彼の腐心した嚼楊枝は、経文上の教えにとどまり、中国の人々に普遍することは無かったのである。

享保19年(1734)にだされた菊岡沾涼の「本朝世事談綺」には、次のように記述されている⁹⁾。

「……天竺にては仏在世よりありし也。楊枝浄水と云事、経文に多し。又齒木を嚙と經にあり。これ楊枝の事なり。唐には此事中絶しけるにや。永平寺の開祖道元禪師入宋し。楊枝をつかひしに、天童山の如浄禪師、甚だ感じられたりとぞ。これよりして、今以て中華にやうじをつかふ事、道元を以て始とすといへり。本朝の矩模ならずや。」

道元(1200—1253)は、鎌倉初期の禅僧である。1223年に都臨安に渡り、4年間を如浄に師事し、1244年大仏寺(のちの永平寺)を開創した。

このように宋代の当時、嚼楊枝は経文に読むのみであつたことが語られている。楊枝を嚼むという仏教儀式は、すでに唐代に途絶えてしまったという。というより当初から、インドの嚼齒木の作

法は、中国では仏事として取り入れられなかったのである。それは中国の仏僧たちが、釈尊の教えを忠実に守らなかったことを意味する。唐僧たちは天竺(インド)から伝わった仏事や作法を中国本来の風習に濾過し、適宜取捨して中国風に消化したのである。案外、楊柳の枝が嚼むのに適さなかったのかもしれない。ともかく、嚼楊枝の存在は僧家から忘れ去られてしまったのだ。

ところが日本の道元は、仏陀の教えを真正に信じ、その定めを頑なに守ろうとした。いわば、コチコチの仏僧だったのである。そんな彼が勇躍して入宋し、釈尊時代の古法に習って嚼楊枝を使い、本山の禅師如浄を吃驚させたのである。それは、日本から中国への仏法の逆輸入であつた。滑稽にも、道元は中国で楊枝を用いた最初の人物、と評されることになる。

道元は比丘(びく)の十八物、つまり僧侶に欠かせぬ18種の仏具の第一に、楊枝を挙げている。彼の著した「正法眼蔵」(しょうぼうげんぞう)の「洗面」の巻には、華嚴経、摩訶僧祇律、三千威儀経などの経典の故実に則って、洗面の作法を教えている^{7,8)}。まず、華嚴経の浄行品にいう「手執楊枝、当願衆生、心得正法、自然清浄。」「手に楊枝を執らば、まさに願うべし、衆生の心に正法を得て、自然に清浄ならんことを。」と誦えることに始まり、作法としての楊枝の用い方を逐一具体的に説く。

「しかあるに、大宋国いま楊枝にたえてみえず。嘉定十六年癸未四月のなかに、はじめて大宋に諸山諸寺をみるに、僧侶の楊枝をしれるなく、朝野の貴賤おなじくしらず。僧家すべてしらざるゆゑに、もし楊枝の法を問著すれば、失色して度を失す。あはれむべし、白法(仏の教法)の失墜せることを。」

「しかあれば、天下の出家在家、ともにその口気はなはだくさし。二三尺をへだててもものいふとき、口臭きたる。かぐものたへがたし。有道の尊宿と称し、人天の尊師と号するともがらも、漱口、刮舌、嚼楊枝の法ありとだにもしらず。いまわれら、露命を万里の蒼波にをします、異域の山川をわたりしのぎて、道をとぶらふ(問う)とす

れども、澆運（衰運）かなしむべし。いくばくの白法か、さきだちて滅没しぬらん。をしむべし、をしむべし。」（増谷文雄訳）

その昔、自国の曲法を嘆いた義浄に倍する憤りではないか。白法の失墜を哀れむべし、とまで極言してやまない。異国の真摯な求法僧に問われて、うろたえる中国僧の様が浮かぶようだ。朝野（朝廷と民間）の人々は言うに及ばず、大宋の僧侶たちでさえ楊枝を知らず、漱口、刮舌、嚼楊枝の法を知らないという。道元は、天下の出家・在家ともに口臭がひどく、二、三尺離れていても臭うと憤り、嗅ぐ者は耐えがたしと嘆じている。この報告からみて当時、中国では歯刷子としての嚼楊枝は全く使われていなかったことが判る。

ともあれ、先述の各時代の資料と史実からみて、嚼楊枝がインドからシルクロードを経て伝えられたことは疑いない。

アラビアの嚼楊枝

一方、森山¹¹⁾、丹羽^{9,10)}は、楊枝の始まりと伝播については、中東にも注目すべきであると主張している。とりわけ、イスラム教文化は見逃せない。

インダス川は、ヒマラヤ山脈からパキスタン東部を南流してアラビア海に注ぐ大河である。その下流部で、ヒンズー教圏（インド仏教を含む）とイスラム教圏とを東西に分割している。イスラム教は、610年にアラビアのマホメット（ムハンマド）が創唱した宗教である。唯一神アラーを信仰し、偶像崇拜を禁じて聖典コーランを奉ずる。信徒はアラビア半島から中近東を中心に、東はインドネシア、西は北アフリカに及ぶ。

マホメットは、シワーク（Siwak）で歯を磨くことを好み、人々にそれを薦めた。イスラム圏のアラビア人は、この Siwak（あるいは Misswak）と呼ぶ楊枝を使用する。これには数多くの木や茎が材とされるが、とくに香木が好まれた。なかでも、アラーク（Alak・学名 *Salvadora persica*）という香気を放つ木が頻用された。これには、ナトリウム性重炭酸塩とタンニン酸を含み、収斂作用がある。

直径 1 cm 数 mm の小枝を、水の中に 24 時間ほど木の繊維が分れるまで浸しておく。そのうえで、樹皮を剥がして繊維を晒す。使用するとき、軟らかくなった両端の繊維を嚙んで毛束にして、交互に磨く。

マホメットは死の床にあって、歯を磨こうと自分のシワークの所在について弟子に尋ねた。それが、彼の臨終の言葉であったという。こうした開祖の説話から、「Alak の木の回り、Siwak の上にはマホメットの子孫がいる。」と謳われた。このようにアラークは、神木として尊ばれた。

斯く、楊枝の使用はアラビア人にとって宗教上の律法であり、生活上の品性ある習慣であった。このシワークはその形状と使い方からみて、インドの嚼歯木、中国の嚼楊枝と同類である。両者と異なるのは、(1)小枝を嚙んだ時や磨いた時の味を重んじて、とくに香味ある木を選んでいること、(2)楊枝の一端だけではなく、両端を毛束にしてブラシ化していること等である。

このアラビアの嚼楊枝が、インドや中国の影響を受けたのか、反対に中国に影響を与えたのか、それは未詳である。

中国の刷牙子

前後するが、道元の「正法眼蔵」の「洗面」の巻の文中、興味ぶかい記述がある。それは、南宋代の当時（13世紀初期）、都臨安（浙江省杭州）では、牛の角の柄に馬の尾毛を植えこんだ歯刷子が、一部の人々に使われていた事実である。

「わずかにくちをすすぐともがらは、馬の尾を寸余にきりたるを、牛の角のおほきさ三分ばかりにて、方につくりたるが、ながさ六七寸になる。そのはし二寸ばかりにむまのたちがみ（馬のたてがみ）のごとくにうゑて、これをもちて牙齒（げし）をあらふのみなり。僧家の器にもちるがたし、不浄の器ならん、仏法の器にあらず、俗人の祠天するにも、なほきらひぬべし。かの器、また俗人僧家、ともにくつのちりをはらふ器にもちある。また梳鬢（そびん）のときもちある。いささかの大小あれども、すなはちこれひとつなり。かの器をもちあるも、万人が一人なり。」

斯く、長さ 20 cm ほどの方形の柄の端から三分の一に、3 cm 余りの毛束の植わった大型の歯刷子である。柄は牛角で、刷子は“馬のたてがみのごとく”馬毛を揃えている。道元は同種のブラシを沓（くつ）や髪にも用いているとして、仏具とはおよそ掛け離れた不浄の器（道具）と断じ、“牙齒をあらふのみなり”と、不快感を露（あらわ）にしている。

この種の歯刷子は万人に一人しか使用していない、と道元は記す。それは不浄の器を憂う心情から過少に抑えたのであって、その実、臨安では無視できないほどに散見されたのであろう。

この史話は、宋代の周守中が編撰した「養生類纂」の記述と符合する。すなわち、「早起不可用刷牙子，恐根浮兼牙疎易揺，久之患牙痛。」「朝起きて歯刷子を使用してはならない。歯根が浮いて歯間が空いて動揺しやすくなる。やがては歯が痛むだろう。」⁸⁾（注・傍点は筆者）

彼は養生訓として、刷掃のしすぎを戒めたのだろう。刷牙子（すなわち歯刷子）の弊害を警告している。すでにこの時代、歯刷子という用語が用いられていたことが分る。この記述からみて、植毛した歯刷子が宋の時代、少なからず使われていたことは明らかである。

周¹²⁾によれば、959年に没した遼の衛国王の熱河省にある墓所から、随葬品の一つとして2本の象牙製の歯刷子の柄が発掘された。熱河省はもと中国北部にあった省で、省都は熱河（現在の河北省北部の承德）である。柄は、洗面器に入れた含漱杯のなかに保管してあったという。

柄の長さは 20 cm ほど、その五分之一が植毛部である。植毛部は太めになっており、現在の歯ブラシと酷似している。植毛は消失してしまっており、8個の丸い小穴が空いている。往時、丈夫で堅く植毛しやすい獣毛が植立していた筈である。遼（916—1125）は、10世紀初めから12世紀初めまでモンゴリア・中国東北地方・華北の一部を支配した。つまり歯刷子は、すでに宋以前の遼時代（10世紀中頃）に作られていたことになる。

斯く、長江（揚子江）下流の東シナ海を臨む浙江省と、黄河下流の渤海に臨む河北省。広大な中

国大陸の江南と河北に、植毛歯刷子の史実がみられるのだ。

この植毛歯刷子は、どこから来たのか。ヒンズー教徒もイスラム教徒も、獣毛帯用を嫌忌する。インドにもアラビアにも、植毛歯刷子の故実も形跡もみられない。

一方、西の地中海、ローマを中心とするキリスト教圏では、歯ブラシは18世紀初期に使われていた。Pierre Fauchard は、1728年に著した世界で最初の歯科医学書「Le Chirurgien Dentiste 外科歯科医」の第5章のなかで、次のように記述している。

「自分の歯を白くしたり、きれいにするために小さな馬毛のブラシ、あるいはラジャやリンネルの布片を使っている人たちは、こうした材質があまりにもごわごわしていること、またこれらを慎重なく頻繁に使うと、しばしば歯肉や歯を駄目にするに気づかずにそれらを使っているのである。」（高山直秀訳¹⁹⁾・傍点は筆者）

文中、中国と同じ“馬毛のブラシ”とある。Fauchard は歯ブラシの使用を批判し、次いで、この習慣をやめて海綿で歯を清掃するように忠告している。歯ブラシの効用は未だ認識されず、却って異端視されていたことを窺わせる。当時、歯ブラシを使うのはごく一部の人々に限られていたようだ。それは、中国よりおよそ800年も後のことである。

とすれば、欧州の歯ブラシは、中国からシルクロードを通して中世ヨーロッパに伝えられた、とみてよいだろう。つまるところ、植毛歯刷子は10世紀以前に中国に発祥した、と推定できる。獣毛を角や牙に植え込むというような、奇抜な穢れた（無宗教の）合目的的な発想は、中国固有のものであろう。

植毛歯刷子は、嚼楊枝とは基本的に相違する点が多い。

(1) 刷毛（はけ）に動物の毛を用いている。

(2) 毛を牛角や象牙の柄に手植えしている。もちろん、のちには木製の柄も作られたろう。

(3) 当初は、貴人のみに限られた高価な贅沢品であったと思われる。

(4) 刷掃後1回で棄てるのではなく、繰り返し使用する。

(5) 宗教的な意味合いは薄く、実用本位の口腔清掃具である。

(6) 馬のたてがみのような刷毛は清掃効果が高く、反復使用できる便利さも加わって重宝がられたと思われる。

ともあれ、嚼楊枝は中国の人々には融けこまず、巷間、口腔清掃具として植毛歯刷牙子が広まっていく。それを、裏づける幾つかの記録がある。いずれも、南宋時代の都臨安の庶民の風俗を事細かく描写している。

「有諸行市……染紅牙梳，按象牙梳，批刷儿(兒)，嶼魚尾剔……」「ある店では……染紅牙梳，按象牙梳，批刷儿，嶼魚尾剔を売っている……。」(「西湖老人繁勝録」¹⁶⁾)

「有舖席，如凌家刷牙舖，傳官人刷牙舖，……有諸色(雜)貨，如染紅緑牙梳，木梳，刷牙子，刷牙子，墨洗，漱孟子。」「小間物屋がある。たとえば凌家刷牙店，傳官人刷牙店，……いろいろの雑貨がある。たとえば染紅緑牙梳，木梳，刷牙子，刷牙子，墨洗，漱孟子など。」(「夢梁録」¹⁴⁾)

「街市中小經紀，有拂子，牙梳，染梳儿，批刷儿。」「街の小間物屋では，拂子，牙梳，染梳儿，批刷儿を売っている。」(「武林旧事」¹⁷⁾) (注・傍点はいずれも筆者)

文中の牙梳とは、歯を梳(す)く櫛のことで、歯刷牙子を意味するとみてよい。また、刷牙子，すなわち歯刷牙子という用語も使われている。当時，市内には刷牙舖という刷牙子の専門店(歯刷牙屋)さえあったのだ。やはり，ここには楊枝という言葉は一切でてこない。

日本の房楊枝

さて、インドから東漸した仏教は、372年中国から朝鮮の高句麗(こうくり)に至る。当時、朝鮮半島は三国の時代で、北方に強大な高句麗、西に百済(くだら)、南方に新興の新羅(しらぎ)が鼎立していた。この三国がせめぎあうなか、仏教はさらに百済に布教する。

百済は日本との往来が繁く、552年には百済王

は欽明天皇に数々の仏像や経典を贈ったという。百済からの仏教文化は、飛鳥・天平期の日本文化の基礎をなした。

仏教に帰依した聖徳太子(574—622)は、法隆寺や四天王寺等を建立し、仏教思想の教化(きょうけ)につとめた。半島からの文化の波は、百済、高句麗を滅ぼして675年に覇権を握った統一新羅の時代もつづく。

嚼楊枝は百済の6世紀、仏事の一つとして日本に伝来する。インドに発し中国を経て、朝鮮から海を越えて、遙かこの島国に到着したのである。

ところで、聖徳太子は600年に中国の随に大和朝廷の使節を派遣した。この遣随使に継いで、894年まで唐へも遣唐使が派遣された。当時、唐は100万の人口を擁して隆盛を極め、世界の一大文明国であった。中国文化を吸収すべく派遣された両遣使は、合わせて20回前後を数えた。ふつう4隻の船で250人ほど、最盛期には一度に500人もの使節団を送ったという。

団員には、貴族の子弟はじめ、留学生として政治・文化・工芸・宗教など各界から選ばれた逸材が数多く含まれていた。留学僧のなかには、のちに仏教史上に残る傑僧たち、道慈、玄昉、最澄、空海、円仁などがいた。

一方、帰朝する遣使とともに帰化する中国人もあった。そのなかには、754年に来日して律宗を伝え、奈良に唐招提寺を建立した鑑真(688—763)のような唐僧もみられた。医薬に精通して僧医の第一人者といわれた彼が、唐の仏教医学を持ち込んだという可能性もある。

このようにその時代、日本は中国とも繁く往来し密に交流を重ねていたのである。したがって、百済時代と遣使時代の重なりからみて、嚼楊枝は朝鮮半島を経ずして、直接、中国から先来したという可能性も否定できない。

いずれにせよ、嚼楊枝はここ日本においても、経典の教義の域にとどまり、口腔清掃の習慣として庶民に広まることはなかった。

ところが、17世紀の江戸時代に入ると、歯刷牙子としての楊枝が貴賤を問わず普及する。9~30cmの楊柳の枝(桃木なども用いられた)、ふつうに

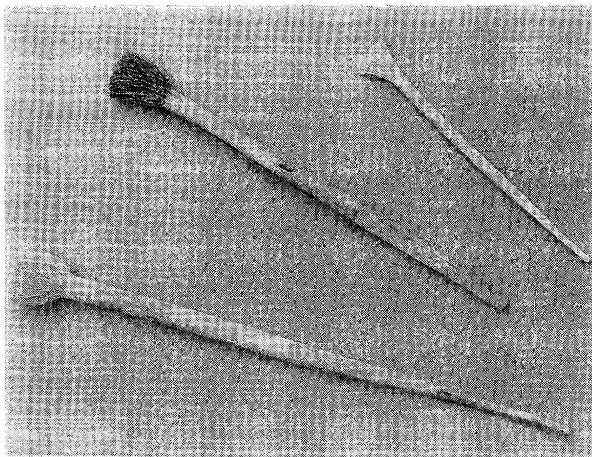


図5 江戸時代の房楊枝（医の博物館所蔵）

は4寸足らず（12, 13 cm）のものを、一端を木槌などで叩いて1寸ほどの房状の毛束にする。真中の手でもつ部分は握りやすいように四角にし、もう一端は舌こき用に先細に削って尖らせた。両端を、大小の房状にしたものもあった。

小林³⁾によれば、先頭を湯煮してから鉄槌で5分ほど叩きつぶし、不揃いの繊維を針の櫛で掻きあげて房状にしたという。

毛束の形状が房（ふさ）に似ていることから、「房楊枝」と呼ばれた。まことに、美的な想像性豊かな表現ではないか。穂（ほ）にも似ていることから、穂楊枝ともいった。また、一端を打ち叩いて毛束をつくることから、直截な表現で、打楊枝、壺打楊枝と称することもあった（図5）。

毎朝洗顔のとき、房の先端を磨き易い長さに指でむしり取ってから、房を嗽茶碗の水に浸した。そして濡れた房に、歯磨塩や歯磨粉をまぶして歯を磨いた。婦女の鉄漿つけ（御歯黒）にも用いられた。歯磨塩は、下総の行徳塩や三河の吉良塩が使われた。歯磨粉は、水でこした房州砂に、麝香や樟脳などの香料を混ぜた磨砂である。磨いたあとは、ふたたび使わぬようにボキンと二つに折って捨てた（図6）。

寛永（1624—1644）の頃には、専門の楊枝屋で売られていた。遊廓吉原をひかえた浅草観音堂裏の奥山には、楊枝屋が軒をつらねていた。「柳屋」という屋号の店が多かった。猿の歯が白いことから、「さるや」という屋号もみられた。すでに叩



図6 浮世絵に画かれた房楊枝（医の博物館所蔵）

いて製品にした房楊枝が、5本10本と袋に入れて棚に並べられていた²⁰⁾。

それでは、この房楊枝は中国の嚼楊枝と、どのようなつながりがあるのか。

(1) 日本は中国と同じく楊柳を産するから、嚼楊枝と同じ楊枝の歯刷牙子として、房楊枝が現れたことに齟齬はない。

(2) 嚼楊枝が仏事として6世紀に伝来していたとすれば、房楊枝と称されて一般化する17世紀まで、時代的隔たりがありすぎて、両者を結びつけるにはムリがある。

(3) 中国と同様に日本には、使用時に嚼んで自ら毛束を作るという行為は根づかなかった。楊柳が噛むのに適さない材だったのか、作法上クチャクチャと噛む行為を嫌ったのか。それに代わって、材を叩いて毛束を作るという斬新な方法が考えだされた。

(4) 楊枝を叩いて毛束を作る行為は、楊枝を嚼んで毛束にする行為とは基本的に異なる。嚼楊枝はあくまで宗教行為の一環であるから、楊枝を

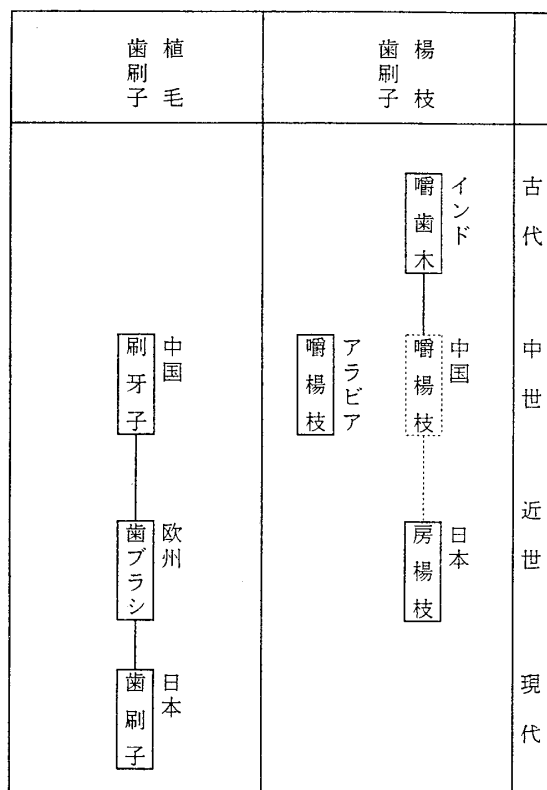


図7 楊枝歯刷子と植毛歯刷子

“叩く”という発想は、インドや中国では決して生まれない。反対に、房楊枝には初手から嚼楊枝のような宗教色はない。それは他人によって事前に作られた、いわゆる製品を使用するという実利的な行為なのである。

それゆえに、同じ歯刷子としての楊枝であっても、両者は似て非なるものと言えよう。結局、嚼楊枝は房楊枝のプロトタイプ（原型）とはなりえず、房楊枝は日本独自に案出された口腔清掃具であると考えられる。

なお、嚼齒木、嚼楊枝、房楊枝を便宜上、「植毛歯刷子」に対し「楊枝歯刷子」と総称することにしたい（図7）。

日本の歯刷子

一方、中国の植毛歯刷子は大陸に留まり、日本に伝わってこなかった。先述のように植毛歯刷子は、10世紀以前に中国に発祥し、清掃効果の高い便益な口腔清掃具として普遍していった。だが不可思議にも、それは日本に渡来することは無かつ

た。中国から中世ヨーロッパに伝わり、大きく遠回りして欧州から日本に到来したのである。

植毛歯刷子が日本に現れたのは、明治維新以降になる。明治5年（1872）頃、鯨髭に馬毛を植えた歯刷子が大阪で製造され、「鯨楊枝」と名づけて市内の小間物店で販売された。これは、インドから輸入された出来の悪い英国製の歯ブラシを真似て作られたという。

それからは、南米、アメリカ、オーストラリア、イギリスから輸入した牛骨の柄に、馬毛や牛毛をブラシとした洋式歯刷子が、市場に出回りはじめる。そのハイクラさと使い易さが好まれ、明治20年以降、植毛歯刷子が破竹の勢いで広まった。反比例して、江戸時代260年間つづいた房楊枝は、一途に衰退していった。

けれども、長年馴染んだ楊枝という呼び名は仲廃れず、房楊枝と区別して歯刷子を「歯楊枝」と称した。その形や使い方から、羽根楊枝、横楊枝と呼ぶこともあった。歯刷子という名称が一般に受け入れられるのは、明治も末になる。

明治23年頃から、中国の四川省重慶産の豚毛が輸入され、満州産とならんで支那毛が極上とされた。明治中頃より安価な竹製の柄が量産され、明治後期にはドイツやフランスからも豚毛が入り、豚毛の竹柄歯刷子が風靡する。

大正に入ると、セルロイド製の柄が製造されはじめ、豚毛セルロイド柄歯刷子が全盛となる。それが終戦後プラスチック製に代わり、昭和26年（1951）よりオートメーション化される。前後して化学繊維のナイロン毛等が登場、明治以来の豚毛を一掃し、ナイロン毛のプラスチック柄歯刷子の時代となる²¹⁾。

このように植毛歯刷子は、明治初めに日本に舶来した。それは中国のものと同種の、獣毛の獣骨柄であった。けれども、それは古く中国から伝来したのではなく、文明開化の波に乗って夥しい舶来品の一つとして、遠く欧米から輸入されたのである。10世紀までには中国に発祥していたとすれば、900年も遅い日本渡来である。仏教と懸隔していたとはいえ、なぜ、植毛歯刷子がシルクロードを東漸して伝わらなかったのか、未詳である。

文 献

- 1) 立川昭二：病いと人間の文化史，新潮社，1984.
- 2) よはひ草 第二輯，小林商店，1928.
- 3) 小林富次郎：歯磨の歴史，小林商店，1935.
- 4) 瀬戸俊一：南海寄帰内法伝中に見る朝嚼歯木について，歯医史，3: 1, 1975.
- 5) 杉本茂春：歯木考，歯医史，5: 4, 1978.
- 6) 長谷川正康：むしばのたはごと 上，書林，1983.
- 7) 石川堯雄：正法眼蔵の衛生思想，歯医史，6: 2, 1978.
- 8) 丹羽源男：楊枝の今昔史，書林，1984.
- 9) 丹羽源男：「Folklore of the teeth」にみる楊枝（その1），歯医史，12: 3, 1986.
- 10) 丹羽源男：「Folklore of the teeth」にみる楊枝（その2），（その3），歯医史，12: 4, 1986.
- 11) 森山徳長：Kanner 著「FOLKLORE OF THE TEETH」考—丹羽氏論文を読んで—，歯医史，12: 4, 1986.
- 12) 周 大 成：中国口腔医学発展簡史，歯医史，8: 3, 1981.
- 13) 宗 懷：荆楚歳時記，555年（魏恭帝2年）.
- 14) 吳 自 牧：夢梁錄，卷十三，1214年頃（南宋）.
- 15) 賈 思：齊民要術，533—544年（北魏）.
- 16) 西湖老人繁勝錄，1200年頃（南宋）.
- 17) 周 密：武林旧事，卷二，1280年（南宋）.
- 18) 孟 元 老：東京夢華錄，卷三，1147年（南宋）.
- 19) 高山直秀訳：フォシヤール歯科外科医，医歯薬出版，1984.
- 20) 中原 泉ほか：浮世絵にみる歯科風俗史，医歯薬出版，1978.
- 21) 下総高次：歯刷子の変遷，歯医史，11: 1, 1984.

問合せ先：〒951 新潟市浜浦町 1-8

日本歯科大学新潟歯学部・医の博物館

中 原 泉